chojiai.jp

ケン、健一。どうしても「佐藤さん」とは呼べません。高校時代からの友として、そして山仲間として、今日ここであなたに語りかけます。どうか少しだけ、耳を傾けてくれていると信じさせてください。

訃報に接したあの日、胸の内で音が止まりました。信じがたい現実の中で、最初に浮かんだのは、夜明け前の山頂であなたが見せた、あの落ち着いた笑顔でした。冷たい風に頬を刺されながらも、湯気立つ缶コーヒーを二人で分け合い、「また来よう」と静かに交わした約束。あの一言に、あなたという人のすべて、誠実さ、継続する意志、そっと隣に立つ優しさ、が宿っていたように思います。

仙台で育ち、大学で情報工学を学び、都内のIT企業で長く金融システムを支え続けたあなたは、仕事場でも常に要でした。障害対応で皆が慌てるとき、あなたが一歩進み出て「大丈夫、順番にやろう」と声をかける。その一言で会議室の空気が落ち着きを取り戻す。若い仲間の背中を押し、責める言葉ではなく、次に生かす視点を渡す。あなたが守ってくれたのは、システムだけでなく、人の自尊心と、チームの信頼だったのだと思います。

震災後、地元の中学生たちに無償でプログラミングを教え続けたことも、あなたらしい歩みでした。大きな旗を掲げるのではなく、夕方の教室で椅子を並べ、配線を整え、「今日の一歩」を一緒に喜ぶ。帰り際に、そっと忘れ物の上着を畳むような、そんな静かな善意の積み重ね。それがあなたの生き方でした。

山では、さらにあなたの本領が発揮されました。雲の流れを読み、地図を広げ、破れそうな道標に気づけば黙って補修道具を取り出す。休憩のたびに豆を挽いてくれる手つきは驚くほど丁寧で、紙コップに広がる香りが、凍えた指先だけでなく、皆の気持ちまで温めてくれました。写真を撮るときも、主役はいつも人でした。夕映えの稜線に、仲間の笑顔を必ず入れる。あなたのレンズは、景色の美しさより、そこにいる誰かの健やかさを見つめ

ていたのだと思います。

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成

ご家族のことを語るあなたの声は、いつも少しだけ弾んでいました。美咲さんのことを、「自分が迷ったら、最初に聞きたい人」と言い、さくらさんの描いた絵を嬉しそうに見せ、陽向くんの新しいキャンプ用の結び方を誇らしげに話す。休日のテントの灯りの下で、静かに湯を沸かし、湯気の向こうに三人の笑顔を確かめるあなたの横顔を、私は何度も見ました。そこにあったのは、約束を守り続ける人の穏やかな幸福でした。

思い出は数え切れません。初めての富士山、夜明け前の稜線で「寒いな」と笑い合い、ポケットから差し出された温かい缶コーヒーの重み。道迷いしかけた尾根で、あなたが地図を指でなぞり、「ここからは風を背に」と進路を示してくれたこと。雨に打たれた山小屋で、濡れた手でそっとカメラを拭き、「この一枚だけは残したい」と微笑んだこと。どの場面にも、あなたの「正直・誠実・継続」が脈打っていました。

そして最後に、あなたは私たちにもう一つの約束を託してくれました。最後の登山写真をアルバムにまとめ、家族と仲間に渡してほしい、と。あれは単なる写真の整理ではなく、道標のような願いだったのだと思います。歩いてきた道を確かめ、これから歩く人の手にそっと渡す。私たちは必ず、この約束を果たします。ページをめくるたびに、あなたの落ち着いた笑顔と、「大丈夫」という声がよみがえるように。

美咲さん、さくらさん、陽向くん、ご両親さま、そして妹さん。深いお悲しみの中にあって言葉を選びかねますが、健一さんは、どの場でも必ず約束を守る方でした。ご家族を想う言葉には、いつも帰る場所への感謝がありました。どうか無理のない歩幅で、休みながら、寄り添いながらお進みください。私たち友人も、これからの道のりをご一緒に支えさせていただきます。頼っていただければ幸いです。あの丁寧な一杯のコーヒーのように、あたたかさを途切れさせないと、ここにお誓いします。

ケン。あなたが何度も見上げた朝焼けの稜線の向こうに、いまも新しい一日が始まっています。私たちは時折立ち止まり、あなたが直してくれた道標に手を添え、深呼吸をしてか

ら歩みを進めます。あなたが信じた「小さな善意の積み重ね」を、日々の中で続けていきます。

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成

また会おう、あのとき約束したように。次の夜明け前、どこかの山頂で。湯気立つコーヒーを分け合いながら、「また来よう」と静かに言い合えるその日まで。

ありがとう、健一。どうか安らかに。

この弔辞は chojiai.jp
で作成されました。いくつかの質問に答えて、今すぐあなただけの弔辞を作成しましょうc
hojiai.jp

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成